小さなコラム　その30

みちくさ いたずら こどものじかん

令和2年 9月 長月（ながつき）

新山 裕之

処暑（しょしょ）（２３日）… 暑さがようやく収まり、２学期が始まります …

処とは収まるという意味だそうです。暑さが峠を越えて、朝晩は少し涼しい風が吹く季節です。セミもミンミンゼミやアブラゼミの他にツクツクボウシも鳴き、朝晩はいろいろなコオロギたちが鳴き始めています。今年は、そんな８月のうちに２学期が始まりました。

＜禾乃登　こくものすなわちみのる　９月２日～６日＞

処暑の末候は「禾乃登」です。朝、子どもたちを迎える際の暑さは例年以上ですが、先日、青空の高いところに刷毛でシュッと白い筋を描いたような「筋雲（すじぐも）」を見付け、少し秋の訪れを感じました。

＜小さなステップを積み重ねていきます＞

このところ、年長児の様子をお伝えしていますが、年長になって急にいろいろなころができるようになるわけではありません。絵を描くことで言えば、年少児は、自由に塗り絵ができるようにいろいろな絵柄を用意し、塗ったものをお面にしたり、ペープサートにして遊んだりすることも楽しんでいます。年中児は、綿棒で自分の顔を描きましたが、これは新しい素材への興味やタッチのおもしろさから、表現することを楽しめるようにする指導上の工夫です。

＜心が揺り動かされる発見や感動体験が表現の源＞

絵の指導は、簡単ではありません。何より難しいのは、描きたい、描いてみようという気持ちをもたせるところです。逆に、それがうまくできれば、後は教師の出番はほとんどないくらいです。先日来、年長児がテラスや遊戯室で描いている対象は、自分たちで種を蒔き、水やりなどの世話をし、「本当に花が咲くのかなぁ？」「いつの間にか背を抜かれちゃった！」と、生長を見守り続けてきた草花たちなのです。

＜日々の出来事を紡いでいく幼稚園の指導＞

そして、その草花と関わる中で、子どもたちの小さな発見や感動を見逃さず、教師が受け止めて学級全体にも返し、みんなで共有してきたことが、絵を描こうとする気持ちの土台となっているのです。その上で、まだ描くことに自信がない子も抵抗なく取り組めるようにする工夫はないかと、クレパスやマジックよりもダイナミックに描けるだろうと何種類も教材研究を重ねて、開発したのが竹の筆だったのです。

＜チャレンジと改善が道を拓きます＞

パレットの固形絵の具は、今回、年長担任も初めて使う描画材だったようで、最初は絵の具の取り方が荒っぽく、せっかくの固形絵の具のよさが出せていませんでした。私は固形絵の具で絵手紙を描くので、筆の使い方や水の量などを教えると、担任たちもそれを参考に再度教材研究をしました。その後、全員に改めて固形絵の具やパレット、筆と水の使い方を指導したお陰で、その後は上手に色を取ったり、混ぜて好みの色を作ったりすることができるようになっていきました。大人も子どもも、試行錯誤をして学んでいきます。

塗り絵は安心して遊べる遊びのひとつ

綿棒で描くといつもと違う感じでおもしろい

こんなに大きくなったよ！すごい！！

絵は子どもたちの感動の表現です。大きく描いた部分は、印象の大きさを表現しているので、「こんなに大きかったんだね」と言ってあげるとうれしいはずです。よく「上手」と言いがちですが、評価ではなく、感動を共有してあげることが表現力を伸ばします。